



TITLE:

学会抄録 第184回京都皮膚科泌尿器科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

学会抄録 第184回京都皮膚科泌尿器科集談会. 泌尿器科紀要 1957, 3(7): 477-479

ISSUE DATE:

1957-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111475>

RIGHT:

学 会 抄 録

第184回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和31年 9 月15日 於 京都府医師会館

(泌尿器科の部のみ)

1 泌尿器系「だに」について 片村永樹・村上仁勇 (京大)

原著 (泌尿紀要 3 卷 3 号) 参照。

追加 小田完五 (京府大)

35才, 男子, 公務員。血尿のみを主訴とした症例, 尿中に喰腎血「だに」を証明した。

2 尿道異物 2 例 広井潤・大橋一郎 (京府大)

第1例: 12才, 男, 自慰の目的でビニール管を尿道にさし込む。触診により外尿道口より約 2 cm, 中心部に径 0.3 cm の抵抗を触れる。キシロカインゼリーにより尿道を麻酔し, 外尿道口より異物鉗子により摘出。異物は手芸用中空ビニール管で直径 0.1 cm 長さ 120 cm, 尿道腔内で幾重にも重複して居た。

第2例: 19才, 男, 自慰の目的で留針を尿道内に挿

入。触診及び尿道線像により Pars pendula 内に針を認む。針尖は尿道腔壁に突刺った状態にあつた為, 尿道麻酔下に針の帽頭部を 180 度回転せしめ指により押出し得た。

文献より現在迄の本邦に於ける尿道異物93例を統計的に観察し, 年令的には思春期・青年期に最も多く56%, 性別的には殆ど総て男で女は僅か4例, 異物の種類としては金属類, 特に針類が多かつたが, 最近の傾向として新しく合成樹脂類が散見された。

3 Depropanex の泌尿器科的応用, 特に尿管結石症に於ける looped catheter との併用について 稲田務・後藤薫・仁平寛己・酒徳治三郎・片村永樹 (京大)

原著 (泌尿紀要 3 卷 1 号) 参照。

第185回京都皮膚科泌尿器科集談会 (休会)

第186回京都皮膚科泌尿器科集談会

(藤浪・加藤両教授歿送記念会)

昭和31年12月15日 於 京府大臨床講堂

10 非淋菌性尿道炎に関する 2, 3 の知見

大矢全節・山田瑞穂・柳井哲雄・西浦力 (国立京都)

尿道炎患者の細菌学的検査並びにその治療成績の概略を報告した。①培養により連鎖球菌を証明したものはブドウ球菌より多く, ジフテロイド菌は極く少数であつた。病原性の強いものは溶血性連鎖球菌とジフテロイド菌であつた。②非淋菌性尿道炎として治療中, 淋菌を証明した症例が有つた。③各種抗生物質又局所療法を長期間行つても治療に抵抗するものがあり, 根治し難いものがある。

11 膀胱類皮嚢胞の 2 例 片村永樹 (京大)

詳細は原著として泌尿器科紀要に発表予定

12 陰嚢瘻症例 前田明 (京府大)

23才, 男。2ヶ月前に排尿時後部尿道に疼痛を覚え当部に米粒大の硬結を触る。疼痛は2, 3日で消失したので放置せる所陰嚢前面が腫脹し瘻孔を作る。尿道への Nr. 20 プギーは容易に挿入出来尿道との交通は全くなく, ごく細い索状に尿道右側に終り尿道背面には及んでいない。尿道炎, 尿浸潤はない。睪丸, 副睪丸, 精管, 前立腺正常にてこの腫瘍との交通はない。海綿体の一部と共に瘻孔切除を行い治癒した。瘻孔部は組織学的に定型的結核像を示し, 他の身体部位には結核病巣なく, その成因に就ては恐らく血行性に限局性結核性尿道周囲炎を起し之が陰嚢表面に破れたものと考えられる。

13 痛風に合併せる尿酸結石症の 1 例 八田栄造・麻生田幸雄 (京大)

原著（泌尿紀要3巻7号）参照。

14 尿管腔瘻治験2例 広井潤（京府大）

第1例：土肥某，59才♀。初診昭和31年5月28日。子宮痛により子宮全剝術後2週に腔より尿漏出を来し，右尿管腔瘻なることが判明。右尿管膀胱吻合術を施行し治癒。第2例：松本某，36才♀。初診昭和30年

9月7日，子宮外妊娠の手術後10日に腔より尿漏出。左尿管腔瘻と判明。左尿管瘻孔閉鎖術を行うと共に腔瘻剝術を施行して治癒。

15 辜丸腫瘍の組織発生論 酒徳治三郎・卜部敏人・三浦武芳（京大）

原著（泌尿紀要3巻4号）参照。

第187回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年1月26日

7 尿道異物症の1例 玉置明（京都少年医療院）

患者18才男子。他人により8.5cm長の釘2本を外尿道口より挿入せられ，その後2ヶ月目に初診レ線像により内1本は膜様部にて，亦他の1本は膜様部及び他端は陰莖根部において海绵体内に夫々尿道粘膜を破り突出して居る事を知り，前者は外尿道口より鉗子にて拔去し，後者は外尿道切開によりその一端を露出拔去した。術後持続カテーテルを挿入10日後これを除去し，全治せる症例を報告した。異物には塩類の沈着が認められた。

8 高度の腎出血のみを症状として診断困難なりし左腎結核の1例 大矢全節・山田瑞穂・西浦力（国立京都）

高度の全血尿のみを主訴として来院し腎臓腫瘍，特発性腎出血の診断の下に開腹手術を行い高度の左腎結核の発見された1例を報告した。

追加 片村永樹（京大）

30才♀ 高度の血尿にて尿閉あり，止血処置後逆行性ピエログラムで左腎上蓋に崩壊像を認めたが，膀胱は殆んど病変を見ない。数回検査を行つたが同様の变化の為化学療法によつて経過観察したが，たまたま妊娠と合併し，薬剤使用不十分となつた所膀胱症状を来とし左腎結核と診断，左腎部切除を行つた。組織学的に結核像を認めた。本例は尿の染色，培養にても結核菌を認めず大出血のみを主訴とした症例である。

9 原発性と思はれる女子尿道癌の1例 大橋一郎・広井潤（京府大）

症例：61才♀。初診昭和31年10月16日。尿閉，尿道出血を主訴として来院す。肉眼的には外尿道口に著変なく，腔壁より内診するに尿道は著しく延長し全長に亘り消ゴム様の硬さを有する拇指大の浸潤を触知す。又腔壁より尿道を圧迫すると外尿道口内面に表面乳嘴

於 京大皮泌科講堂

状の腫瘍の一部の出現を認めた。レ線学的に尿道の延長及び狭小を認めた。組織学的には腺癌の像は認められず，単純癌であつた。尿道全剝術を実施せんとした患者が肯んぜず，為にCo⁶⁰療法（外尿道口の方，腹側及び背側よりの3方向より各々15回宛，毎回200r連日照射）を行つた。腫瘍は著しく縮少し排尿可能となり一旦退院した。

追加 酒徳治三郎・八田栄造（京大）

42才，56才，44才の3例の原発性女子尿道癌に就いて追加した。組織学的に前2例は単純癌，後1例は腺癌であつた。

10 夜尿症の成因に関する私見 小田完五（京府大）

夜尿症を便宜上純機能的のものと何らかの器質的障礙が関与していると考えられるものとの2つに分け，何れの場合にも副交感神経機能亢進状態が素因として本症発現の基調をなしているもので，前者には此の素因に睡眠に基く大脳皮質の興奮性の低下と副交感神経機能亢進とが加つて夜尿症の発現を見，後者に於ては此の素因に睡眠に基く同上2様の影響と何らかの器質的障礙による潜在性の排尿異常とが加つて夜尿症の発現を見るものである。詳細は臨床病態生理学大系（中山書店）第5巻に掲載。

追加 稲田務（京大）

夜尿症の成因に関しては唯今小田博士の述べられた原因，特に自律神経異常殊に副交感神経緊張亢進症が密接なる関係ある事に私も賛同致します。

11 Percutaneous Trocar Nephrostomy について 後藤薫・日野豪・片村永樹（京大）

原著（泌尿紀要3巻5号）参照。

12 前立腺剝除後の持続洗滌法の試み 酒徳治三郎・日野豪・片村永樹（京大）

前立腺剝除後，灌流用バルーン・カシーターを用い，

て 膀胱持続洗滌を行つたのでこの試みを紹介した。

稲田務他（京大）

13 昭和31年度京大泌尿器科患者の統計的観察

泌尿器科紀要3巻5号に発表。

第188回京都皮膚科泌尿器科集談会

昭和32年2月23日

於 京大皮泌科講堂

1 先天性尿管弁膜形成の2例 大森孝郎・山崎巖（京大）

原著（泌尿紀要3巻7号）参照。

2 尿管管粘液癌再発例 広井潤（京府大）

53才，男。昭和29年外松等が尿管管粘液癌として泌尿8巻10号に報告した例。当時腫瘍を剔出し術創全治退院後約2年5ヶ月全く健康であつたが，昭和31年5月腹壁術創に硬結を認め，昭和32年2月4日受診。全身所見に異常なく，局所を診るに恥骨上縁より臍下に約10cmの術後瘢痕あり，これとは関係なく正中から稍々左側に偏して軽度膨隆し，該部腹壁筋深部に表面稍々凹凸のある鷲卵大円盤状硬固の腫瘍を触れ左右にはよく移動するが下方は索状となり恥骨に固定している。膀胱鏡検査，X線学的検査は共に正常。そこで正中切開により腫瘍に到達，腹水は殆どなく腫瘍は体腔腹膜より発生し一部は直腹筋内に浸潤していたので周囲正常組織を含めて広汎に剔除し，他に腹腔内転移病巣のないことを確めて腹壁を閉じた。腫瘍は，3.5×5×2cm，重さ約50g，淡灰黄色，硬く，表面一部は顆粒状を呈し，剖面は灰白色稜餅様粘稠なる物質で充され一部膠様透明であつた。組織学的に腫瘍の大半は顕著な粘液変性に陥り胞巣内に一部クロマチンに富んだ円型乃至橢圓型の核を有する嚢子状乃至扁平状の癌細胞が散在性或は充実性に小塊状に配列し，その間に所謂印環形細胞が散見せられ，癌浸潤は筋肉内にも及んでいた。

追加 外松茂太郎（京府大）

今の報告にもあつたように組織像の大部分は粘液癌の所見を示している。しかしよく見ると一部には移行上皮細胞よりなる癌巣があり，一部の細胞は粘液乃至は膠様物質を分泌しているが，大部分は間質から粘液変性を来したような像を示している。しかしてこの患者は2年半で再発は来しているが経過長く予後は比較的良いように思われ，この予後と組織像との間には一定の関係があるのではないか。又尿管管粘液癌の発生経過としては移行上皮細胞→嚢子細胞→円柱上皮→腺様構造→Mucin分泌が一般に認められているが，上述の組織像は必しもこれに一致しないようである。以

上のことは興味のあることであり今少しく検討して発表したい。

3 腰筋膜切開手術にて，膀胱症状の軽快した経験2例 柳井哲雄（国立京都）

最新化学療法を行なつても，頻尿，排尿痛，残尿感等，膀胱症状の軽快しない症例を，屢々経験するが，左下腹部に疼痛を伴なつて膀胱症状を訴える患者2例に腰筋膜切開術を施行し，良好な経過をとつたので報告する。24才の男子と28才の女子で，術前，術中，術後の所見，特に尿所見，泌尿器科的検査所見を報告し，併せて，理論的根拠の一端を報告す。

4 前立腺剔除後の尿道狭窄例 楠瀬信二・久保泰徳（京府大）

61才，男。初診昭和29年1月，前立腺肥大症の為同年2月23日恥骨後前立腺剔除術を行い，術後経過順調，4月28日治癒退院したが，11月初旬より尿濁，排尿痛が現れ，昭和31年初めより尿線狭細，排尿終末時痛，残尿感，更に11月より高度の頻尿，更に32年1月には尿閉を来す。診ると尿道へのブジー，カテーテル挿入は不能にて膀胱頸部に抵抗があり，膀胱穿刺を行つた処，尿は強度に濁濁，膿球（卅），赤血球（+），大腸菌（卅）尿道膀胱X線像によると前立腺床の軽度拡張についてその上方が線状に狭小となり，膀胱頸部はロート状を呈し，膀胱内に鳩卵大，橢圓形の結石像が認められた。そこで高位切開により結石を取り出すと共に膀胱頸部狭窄部を切開拡張し，留置カテーテルを置き，手術を終つた。結石は磷酸塩で特に核をなしている様な異物等は認められなかつた。留置カテーテル除去後は排尿回数も1日5～6回となり，排尿痛，尿濁も消失して全治退院した。

5 Pyramide, INAH 併用による尿路結核の治療に就いて 稲田務・大森孝郎・杉山喜一（京大）

泌尿器新領域に於ける結核に対し上記薬剤の投与を行いその臨床成績に就て報告した。

学術映画（台糖ファイザー提供）

1) Treatment of Burns

2) Resection of Ureteropelvic Junction